

第18回 世界を旅する

中村 安希（ノンフィクション作家）

2011年5月21日



世界を旅する

早川 皆様、こんばんは。時間になりましたので、ただいまより第18回名田庄多聞の会を開催いたします。本日は中村安希様をお招きして「世界を旅する」と題したお話を聞きます。ご存じの方も大勢いらっしゃるかと思いますが、中村さんは『インパラの朝』で第七回開高健ノンフィクション賞を受賞された方です。とても過酷な旅をされておられまして、ここにおられるこのような方が過酷な旅をされたのですが(笑)、どうしてそのような旅をされたのかは、一週間ほど前に出版された『B。フラット』を読むと、その一端が分かるかと思えます。それでは中村さんよろしくお願ひします。

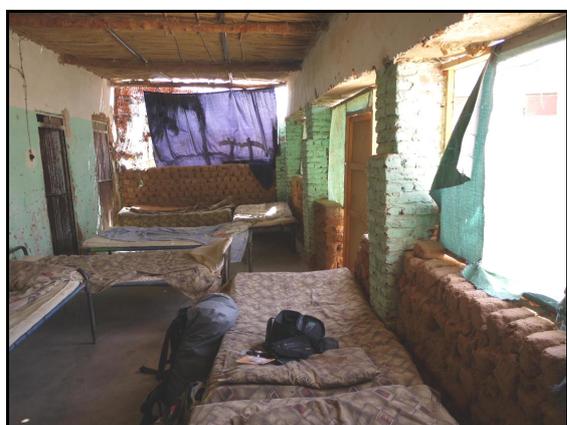
序、バックパッカーの旅

中村 みなさん、こんばんは。今日はわたしがした旅についてお話ししたいと思えます。わたしはもともと旅が好きだった人間ではないのです。高校時代も大学時代もほとんど旅をしていません。初めて旅に出たのが2006年、26才の時です。それが初めての旅でしたが、一度旅に出たら今度は帰らないことになり、二年間旅を続け、2008年に帰国しました。旅をしていたとき、二年間旅をしたらもう一生旅はしないとみんなに宣言していたのですが、帰って見たらまた行きたくなくて、最近もちよくちよく旅に出ています。いまのところ65カ国ほどまわって

きました。皆様の中には今までたくさん旅をした方もいらっしゃるかと思えますし、また、全然海外には行ったことがない方もいらっしゃるかと思えますが、あちこち行かれた方も、そんなことは知っているかと思いつつも、初めて聞きましたというような顔で(笑)、是非聞いていただければと思います。

それではこれから皆様と一緒に一時間ほど旅をしていって、写真なを見ながら、そのあと一時間半ほど質疑応答があるということなので、そのときに質問をしていただければと思います。

この写真はアフリカのエジプトから船に乗ってナイル川を下って渡った最初の国のスーダンという国の町で撮ったものです。これがわたしの泊まった宿です。



このとき気温がほしい50度。もう息をするのも苦しい、息をしようと肺が熱くなるのですね。頭の中もぼんやりしていますし、なにもすることとがなくて寝るのです。バックパッカーというスタイルで旅をすると宿はこういう感じになります。バックパッカーとはどんなものか、ご存じでない方も多いかと思しますので、これからの話に心の準備をしておいてほしいと思います。それでスライドには、「ready?」と書きました。

これはさらに南のエチオピアという国で泊まった宿です。ここはなかなかリッチな宿で(笑)個室になっていました。シングルベッドが入っていて、ベッドの上にビニールシートが掛けてありますが、これはわたしがいつも持参しているマットです。なぜこういうものを敷いて寝ているかというところ、南京虫が出てくるからです。南京虫にかまれると非常にかゆい。直径2 cmくらいの赤いしりができます。南京虫は2点喰いと3点喰いとかで喰われるので、しりが2点、3点、2点、3点というように全身にできます。南京虫から身を守るためにこういうビニールシートを持ち歩いています。ここはなかなか素敵な個室で、皆様、だんだんバックパッカーになつてみたくなってきたかと思えますが(笑)。

旅に出るとトイレに行かなければなりません、これは典型的な途上国のトイレですね。普通のトイレですが、よく見ると便座がありません。ではどうやってやるのかと。いろんな方法があるのですけれど、わたしの場合はこの縁の上に登って、そしてしゃがんですると。なかなか器用な人でないといけない(笑)。外側に落ちるのはいいのですけれど、中側に足が滑ったときは大変(笑)。特別なトイレですね。



これがバックパッカーのトイレです。皆様、旅に出たくて仕方ないかと思えますが、それではいよいよ旅に出ます。

第一部、旅に出よう。

一・世界の違い

これはアフリカのザンビアという国で見つけた車です。トヨタです。トヨタは日本のメーカーですが、えらくカッコいいオープンカーが来たと思えました。



「お兄さん、お兄さん、ちょっとこれなんだよ」と声を掛けると、「カッコいだろう、俺のオープンカーだよ」というのですね(笑)。「お兄さん、これ屋根ないけど、どうしちやったの」と訊くと、「イヤ、暑いから取っちゃったのだよ(笑)。」ということ、今年の夏はとても暑くなるかも知れませんが、もし皆様も暑くなればおうちの車の屋根を取って、アフリカ風のオープンカーを是非作っていただきたいと思えます。

次は、これはカミソリ療法というのですが、この写真の背後に見えているのはナイル川です。これはナイル川の近くにある、スーダンのアブリという村にいったときに撮った写真で、写っているお母さんの息子さん25才がわたしのお友達です。そのおうちにたまたま泊めてもらうことになって、しばらくお邪魔していました。一週間ほどいました。スーダンはイスラム教の国ですので、男性と女性は別々のところに寝るのが常識です。わたしはわたしのところで寝ていたのですが、隣の男部屋から夜中に「おえつ」て聞こえてくるのですよ。どうしたのかなと思いつながら、隣は男部屋なので、入ってはイカンということで、わたしは心配ながらも朝を待ったのです。朝になったので、昨日の夜、「おえつ、おえつ」て聞かされたけれど、大丈夫だったかと友達に訊いたら、「食中毒になっちゃったよ」というのです。だけどもお母さんが治療してくれたから大丈夫だと。「お母さん、どうやって治療したの」というと、どうも、すねをカミソリで縦に切るのですね。そこから血が出て、吐き気をもよおして、全部悪いものが出てしまうので、すぐにすつきりして体調がよくなったというのでした。

ええつと思つて足を見せてもらつたら、縦に切れ目があつて血が出た形跡があるのですね(どよめき)。ということ、皆様も間違えて変なものを食べてしまつて気分が悪くなつたら、是非スーダン風のカミソリ療法ですねを切り刻んでみてください。

世界にはいろんな場所に住んでいる人がいまして、これはブルネイという国の水上にあるおうちです。こういう風に水の上に家が建つていて、近所のおうちに行くときはどうやつていくのかというと、バスには乗れないし、泳いでいくのでもない、ボートで行くのです。ボートに乗っていくとボートもガソリンが必要なので、水上にスタンドがあります。わたしたち陸の上に住んでは陸の上にはスタンドが必要だし、水上に住んでいる人には水上のスタンドが必要です。こういう風从上からチューブが下りてきてガソリンを入れます。

次は価値観の違いということで、これはアフリカのトーゴでの写真です。これは路上の風景ですが、夜になると真っ暗になります。というのもほとんど電気がないからですが、電気がないので物売り達は夜になるとロソクに灯をともして商売を続けるのです。しかし、こういうアフリカの小さな村にも電気が来るようになりまして、発電機で発電するのですが、でも灯りはつけないのです。じゃ、ここの人達はわずかな電気をなにするかという、音楽に使う。音楽を聴くのに使う。道路は真っ暗なのに、スピーカーから音楽が、ボンボコボンボコ、鳴っているのです。闇の中で子供が夜通し踊っている。日本で電気が少しあつたら、皆さんまじめでしょうから、勉強に使うとかテレビを見るとか、そういう風に

わたしたちは発想するのですが、この村の人達は電気があればまず音楽に使う。これは、ちよつとした価値観の違いかと思ひます。では次に世界の国々を見ていきます。

世界の国々

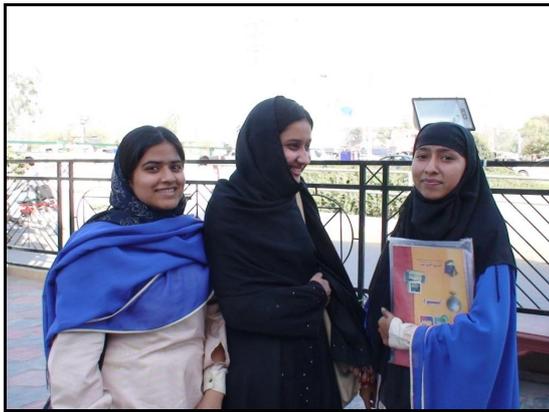
まず、カンボジアってどんな国

これは2006年の写真ですが、これは首都のプノンペンです。カンボジアっていろんな紛争もありましたし、ポルポト政権などあつて、非常に混乱していましたが、この写真を見る限りは、すごく発展していると思ひませんか。トヨタのレクサスなどが走っていて、カンボジアってこんなに賑わっているのか、すごいなと思つて、ちよつと驚いて、次の日、友達のパイクの後ろに乗せてもらつてプノンペンの周辺をバイクで走り回つたのです。そこで撮るのがこれです。だから、プノンペンとひとことでも言つても、あなたは、はたしてこの近代的なつちを見たのか、それともこの田舎なのか、ずいぶん印象が変わつてくると思ひます。というわけで、カンボジアってどんな国なのか、疑問になるのです。

次は、パキスタンです

この写真を見せると、だいたい、「おお、オサマビンラディンが多いな」と。一般の人は考えるわけですね。最近死んだということになつていますが。パキスタンというと、テロの国、恐ろしい国といわれるのです。パ

キスタンに行きましたという、「ああ、大丈夫だった、怖くなかった」といわれるのですが、はたして、そうかなと。



上の写真はさつきと同じ。シャワールで撮った写真で、下は別のところですが、道を歩いていると必ずみんな声を掛けてきます。「おいで、おいで、お茶飲んでいきな」と。とてもフレンドリーでもてなしてくれるし、親切なとてもいい国なのです。下の写真は女子大生です。彼女たちは、恋愛の話をしたり、結婚の話をしたり、海外旅行の話をしたりとか、普通のことを話しているのです。帰りはお茶屋さんによって茶飲んで帰りましょうと。日本の女子大生とどこが違うのか。

。パキスタンというと非常に保守的で、オサマビンラディンがいるような国だと思われているのですが、いったいそれは本当にパキスタンの姿なのか。そのあたりを皆様に少し考えて欲しいなと思います。

次は、イランってどんな国。

これむちゃくちゃ恥ずかしい写真ですがわたしです(笑)。イランはイスラム教の国で、この国に行くためにビザを取らなければいけません。わたしはビザを取るためにウズベキスタンのイラン大使館に行きました。すると、申請書類に出す写真はこの写真にあるようにスカーフをかぶらなければいけないというので、スカーフをかぶって、写真屋さんに行つて写真をとって来ました。今度はビザを取るには夫がいるということ、というのは、イランは夫か男の人を同伴していないと入国できないというのです。「夫か」と思いますが、写真はどうかできるけれど、夫はどうしようかなと思ひ、かわいそうな日本の青年をナンパさせていただきました。まして笑、結婚しようよと。それ以外なのです。ということ、わたしは偽装結婚しまして、大使館に行きまして、二人で面接を受けました。「夫の名前はなんだ？」といわれ、聞き忘れたな、等と思って(笑)。冗談なんですけれど、「夫の職業はなに？」「学生！？」等とどうにかパスしました。四日くらいかかりましたが、ついにビザを得ましてイランに入国して、イランに入国して途端に別れたのです(笑)。そんな風にして、イランは本当に保守的で大変なところに来たなど、そういう印象でした。



この写真を見てください。入ってみてこれです。

左の写真の左端がわたしです。この中で一番保守的な格好をしている。スカーフをかぶって髪の毛を隠して入ってきたのはなになだったのだと。隣のイラン人の女の子なんかはジーパンをはいて、足組んで、髪の毛なんかは半分くらい出ている。おうちでは、プーマの短パンなんかを普通にはいている。この女の子はたまたまバスで隣に座った子で、どこも行くところないと言ったら、うちにおいでと言ってくれたので行ったら保守的ではなかったのですね。「どうしていつまでもそんな黒いコートを着ているの、脱ぎなさいよ」と言われ、いいのかなと思っただけなんです。彼女は大学で、パソコンの研究なんかをしています、車の運転もします。わたしは彼女の車に乗せてもらいました。ということ、普通、イラン、イラクというと、保守的な国に思われていますが、簡単には当てはまらないと思えました。行ってみるとそういうことが見えてきます。

スーダンってどんな国

スーダンはさつきから何度も出てきていますが、この国はダルフール紛争等の問題がありまして、危ない危ないと言われているのですね。これは外務省が出している、海外安全ホームページから取ったものですが、わたしはどこかに行く前にどれくらい危ないか調べます。色が赤に近づくと危ないと言われています。この図を見るとスーダンはオレンジになつているので、危ない場所なのです、外務省によると。わたしは外務省が危ないというのなら行きます(笑)。この図の右側が昨年ワールド



キャンプの開催された南アフリカ共和国で、こっちはなにも赤くなくていいません。真っ白です。こういう国はいつでも意味がないと思っっているのですが。



それです。それです。わたしはスーダンに行つたのです。そこで出逢つた人達がこれです。わたしが夜の道をひとりです。ふらふら歩いていたら出てきた人達で、おじさんとかおばさんたちが、「あらあら」と意味もなく笑っているのですよ。歩いているとチューインガムなどもくれたりします。それで、井戸端会議などになつて。外務省などが真っ赤かに塗りつぶし

たあの危ないスーダンはいつたいたいのだろうと。これはたまたま知り合つた方が「うち、泊まっていきなよ」というので、「いいんですか」といつて、後ろに見えるトンガリ屋根に泊めてもらいました。

外から見ると、なんか辺鄙なところに来ちゃったなと見えるのですが、中には扇風機があります。ベッドがたくさんあります。テレビがあります。DVDプレーヤがあります。この藁でできた家の中で、夜は寝転んでDVDを鑑賞する。まあ、これがスーダンですね。

さつきお見せした南アフリカ共和国ですが、これ、外務省は真っ白に塗りつぶしていますが、この国は非常に危ないです。現地の友達から言われたのですが、「夜間は絶対に外に出るな。もし、不運にも撃たれたら、相手は必ず三発撃ってくるぞ」。犯罪はとても厳しく取り締まられていて、犯罪に手を染めると死刑になるのです。それで相手も命がけでやってくるので、必ず息の根を止めてくる、だから、一発撃たれたら必ず三発来るからあきらめろと。そうと言われたのが、この真っ白な南アフリカ共和国です。

日本ってどんな国

海外に行つて今まで自分が得てきた海外の情報、イメージ、それらと現地人々の暮らしぶりが違えば違うほど、わたしが気にするのは日本がどのように海外から見られているのか、ということ。このことについては、皆様は中で暮らしておられますが、外からどのように見られているのかを普段から考えていただきたいと思います。このことに関

してはわたしは答えは出したいくないなと思つています。是非皆様に考えていただきたい。

旅をして分かつてくるのは、ひとつの国を、この国は危険な国だとかこの国は安全だとか、あるいは、この国は富める国である国は貧しい国だとか、よくわたしたちはそういう風にいうのですけれど、そういう国は存在しません。国の中に貧しい人もいればお金持ちの人もいます。日本でもそうです。日本はリッチな国と言われますが、アフリカでBMWに乗っている友達に、「わたしの国は貧しくて日本は豊かな国だ」といわれても、わたしはBMWなど一度も乗ったことないよと思うのですね。ですから、それぞれの国に、それぞれ、保守的な人もいればリベラルな人もいる。この世の中には天国も地獄もないと、それは人それぞれの生き方によって変わってくるのだと思います。

世界はひとことと言い表すことはできない。わたしはよく旅をしているので、「中村さん、世界ってどうですか」と抽象的な質問を投げられるのです。そんなことよく分かりません。分からないから旅をするのですね。もし世界のことがかかっているのなら、わざわざ旅をして世界のことを知る必要もないと思います。ということ、わたしは分かりません。

現地に行つてなにをやらなければいけないかというのと、よく見渡すということ、例えば、カンボジアの例ですと、もしかしたら目の前には豪華なビルが建っているかも知れないけれども、ふり返つたらスラムがあるかも知れない。だから、ひとつの国に行つて、例えば観光地など

に行つてなにかひとつだけ見て、それでその国のすべてが現れていると思わないことですね。なるだけ、いろんなところをぐるっと見渡すことが必要だと思ひます。

それから、自分自身も見えていないこと、分からないことがあるだろうなということも知つておく、想像力を高めることが必要です。それから何よりも自分は自分の無知を認めたいと思ひます。あなたは海外のことに詳しいのではないかといわれるといつも苦しい気持ちになるのは、旅をすればするほどいろんな現実が見えてきて、それは毎回違うのですね。ということは、わたしは歩けば歩くほど、さらにいろんな現実を発見する可能性がある。本当にいろんなことを知らずに生きていくということですね。世界には200カ国以上の国があつてわたしは65カ国しか行つたことがなくて、じゃ、残りはどうなつていくのか。さらに、行つたことのある国でも行つたことのない地方は山のようにある。ということ、わたしは旅をすることで自分の無知を認めるようになりました。昔はもつと知つていようような気分だったし、知つたかぶりだったのだけれど。

第二部 世界の問題とわたしたち

第二部は、世界の問題とわたしたちということでもう少し踏み込んだお話しをしたいと思います。

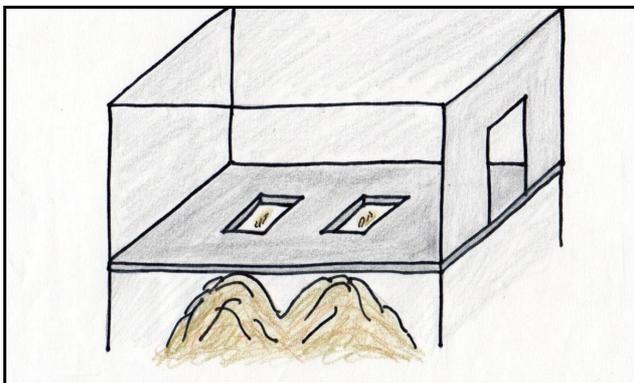
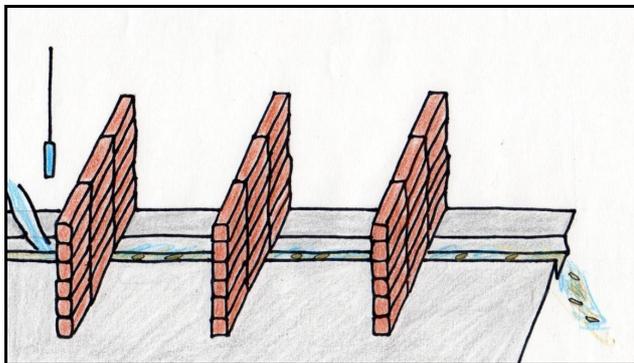
人間、旅をしていても生活していてもそうですが、一番問題になるの

は食べるものと出すことです。飲むことの水、それに排泄。特に旅をしていると、いつ食べるのか、どこで食べるのか、なにを食べるのか、いつどこで出すのか、がすごく重要な問題になります。いつも食べ物とトイレを探して旅していると、言っても過言でなくらいです。旅をしているとトイレがすごく気になります。ということ、世界のトイレを見てみると、と思います。

世界のトイレ

まず、インド。トイレはどこですか。絵を描いたのですが、路上にこういう感じで壁が立っているのです。足場みたいなのが手前にあって、男の人は壁に向かってするのです。これは不通の路上にあるので、下に溝などないのです。ということは汚物はどこに行くのか。わたしはその先を追いかけたことはありませんが(笑)、出てきたものをどうするかは大変な問題ですね。これはインドでは普通にあります。

朝のトイレ、わたしはインドでは列車に乗って旅をするのですが、夜行列車に乗ってゴトゴトと行って、朝になると窓から朝日を見て、外を見ると、線路に沿ってずらっと人がしゃがんでいるのです。こっちを向いて。皆さん、なにをしているかという、朝のお通じのタイムなのですね。トイレがないと路上ですということですね。インドで列車に乗ると、こっちを向いてしゃがんでいる皆さんと目があったりして、どうしようかなと。そういうことがけっこうありました。



インドのある駅にたどり着きました。わたしだって、そりゃ、一晚我慢してきましたから、トイレに行きたい。それで、駅の係員にトイレどこですかと訊いたのです。すると、あっちにあるというから、そっちに行つたのです。駅員さんが言ったところに部屋があつて入った。そこには便器がない、なにもない普通の空間なのです。ようーく見ると床がちよつと傾斜している。傾斜している先が色が変わっている。おお！と思ひまして(笑)、わたしはそこでする必要がなくてほかを探しましたが、これは中国です。

上が「仲良しトイレ」。壁で仕切つてあつてドアのないトイレです。しゃがんで待っている人と目があつちゃうのです。目があつたときは微笑んで「ニーハオ」というのが常識かと思うのですね(笑)。だから「仲良しトイレ」と名付けたのです。下は、「もつと仲良しトイレ」。これは壁がなく、横を向くと隣の人と目が合う。「ニーハオ」と言つてほしいですね。そのときは手と手を取りあつて「ニーハオ」と。だから、「もつと仲良しトイレ」。中国の沿岸部は発展していますから、町中ではこういうトイレはありませんが、山岳地帯に行くところというのがあります。チベット自治区では下のようなトイレが残っています。

これは、「天然トイレ」。これはアフリカでよく見たトイレですが、藁が積んでありまして藁の山を登っていくのですね。好きなスポットを見つけてすると。わたしはこのトイレがけっこう好きだったのです。中国よりインドより。というのは、オーブンエアーなので、臭いがなくて、乾燥していて、いいんですね。ただ、これから人口が増えてきて、この山にやってくる人の数が増えると足の踏み場などが大変だなと、そういうタイプのトイレです。

トイレの話はこれくらいで止めて上水の話をしたと思います。

地球の資源、上水

上水の話の前に、地球資源ということ、二つほどエピソードを話したいと思います。

トルクメニスタンという中央アジアの国に行ったときに、民家に泊まりました。民家でいろんなご飯を食へさせてもらつていたのですが、そのおうちに外に四つコンロがあるのですね。そのコンロから炎がばーと出ていまして、料理を終わつたあとも、スイッチを切らないのです。一日中火がぼあーと出ているのです。わたしの感覚ではすぐもつたいたい。皆さん、多分そうだと思いますが、家で料理し終わつたあとに火を一日中付けっぱなしという人はいないと思います。トルクメニスタンでは付けっぱなしでいる。もつたいたい、もつたいたとおもつていたのです。よく考えたら、トルクメニスタンは天然ガスの産地なので。彼らにとつてはガスは高くないし、もしかしたらただかも知れない。たいして重要なものでないので、本人達はなにも思わずに、一日中コンロを付けっぱなしにしている。

もうひとつのエピソードはイラン。イランに行ったときに露天とかで買い物をする。バナナを買つたとします。すると袋をくれるのですが、その袋がものすごく分厚いのですね。プラスチックの分厚い上等の袋を使っている。こんないいビニール袋を、バナナを買うたびに、ナッツを買うたびに、サンドイッチを買うたびにもらつて、もつたいたいなと思つていたら、やっぱりイランは産油国なので。プラスチック製品を安く作れる。どれほどビニールを使つてもあんまりもつたいたいな感じがしない。自分の国でたくさんとれるものはあまり大事におもわない。感謝の気持ちがない。

それでは日本の資源は何かという、水です。

日本の資源は水

この写真はモンゴルを旅行していたときのゴビ砂漠を車で行っているところです。横にラクダが写っているいかにも砂漠なのですが、この旅をしているときに、車にはイスラエルの三人の旅行者とわたしとモンゴル人のガイドが乗っていました。なにが大変だったかというと、水をめぐる争いがものすごく大変だったのです。イスラエルの三人がモンゴル人のガイドに水を取りに行けというのですね。どこかのオアシスか集落に着くと早くタンクを持って水をもらってこいと、ものすごく怒るのです。そのガイドさんはかわいそうにタンクを持って水を取りに行くのですが、イスラエルの人があまりに強くいうものですから、そのうちガイド君が泣き出してしまいました。わたしが中に入って、「まあまあ、イスラエルの皆さんよ、そんなに怒らなくてもいいじゃんか、水ぐらい」と言ったのです。そしたら、「日本人のあなたには理解できないこと」と言われた。イスラエルは中東にあつて、乾いたところにあるのですね。周辺の国と水をめぐつてもすごい戦いをしてきた地域の出身なのです。水のない国の人にとつては水はものすごく重要なもの、戦つて得るものなのです。それはやはりわたしたちの感覚では理解できていないことだなおもいました。

これはサハラ砂漠で取った写真ですが、遊牧民は、雨が降らない、それから砂漠化が進むということで、どんどんどんどん、町の方に寄せられてきているのです。その結果スラム化して、この写真にあるようなひ

どい環境で住んでいます。

世界は、今、砂漠化と水不足、そういうものが深刻化しているのが、日本を出るとよく分かります。今日もこちらに来させてもらって、緑豊かで水がたくさんあつていいなとおもうのですけれど、世界に出ていって、なにが一番驚くかというと、乾燥具合に驚きます。

これは、バックにあるのは富士山で本栖湖で取った写真ですが、水が実に豊かです。日本の強みはやはり水だと思います。これは、イランには石油がたくさんあつて、トルクメニスタンには天然ガスが豊富にあるのと同じように、日本には水があると。このことを強調しておきたいと思えます。これは世界にないものですから。

水とトイレの未来

中国とかインドの例を挙げてきたのは、これらの国は人口が多いですね。人口が10倍になると10倍の汚物ができます。こういう国が、今、新興国として工業化を進めていますから、工業用水がどんどん必要になる。人口増加、都市生活化が進むとさらに水が必要になる。環境破壊が起つてくる。ともかく、わたしたちは水を飲んで最後に排泄する、それがわたしたちが生きる上の基本ですので、この部分が世界で脅かされてくるというのは深刻な問題じゃないかなと思います。日本にいとあんまりそういうことを思わないのですが、世界規模で見るとこれが非常に大きな問題だと思えます。

わたしが日本に期待していることは、水のことなら日本にお任せ、のようなことができないのかなということです。日本は下水も世界の基準でみるといいです。ヨーロッパも行きまじし、中国の大きな都市にも行きまじしが、先進国でも意外と水道や下水の設備がもろかつたりするのですね。都市なのに。お風呂なんかもぴかぴかなのに、お湯を出しているると突然水になつたり、ちゃんと流れていかないとか。トイレットペーパーを流せない国はけっこう多いのです。浄水システムは日本の相当の強みであるといえると思ひます。

出来ることは植林です。木がないと、砂漠もそうですが、水が逃げて行つてしまひます。木を植えていく、そういう方向にわたしたちの智慧を使うべきでないかと、世界を旅しているるとよく思ひます。

何が問題なのか、幸せのバロメーター

何が問題なのかということ、この二つの写真を見ていただきたいのです。左はニジエールの子供で、ニジエールは世界の最貧国の一つです。子供は笑つています。右側はラオスの子供で、この子はものすごく怖い顔をしてます。わたしが幸せのバロメーターということだ思っているのは、子供達の顔で、ものがなくても子供が笑つていればオッケ。逆に、ものがあつても子供から笑顔が消えているのは問題だと思ひます。

アフリカは貧しい貧しいと日本では見られていて「アフリカに行かれたようだが貧しくて大変だつたでしょう」と言われたりしますが、物質

的にそんなに豊かだなくても最低限の生活環境があればいい。最低限のバナナがあるとか、そういう風にしていけば、子供達は笑つて生きていける。それほど問題はないと思ひます。むしろ大量消費文化の弊害、ものがあり過ぎることの方がずつと問題でないかなと、わたしはいつからかおもうようになりまじした。

というのはこれです。世界つてゴミだらけなのです。「世界を回つて、文化遺産をみたり、どこどこ絶景でよかつたでしょう、海外旅行つてよかつたでしょう、うらやましいわ」と言われるのですが、わたしはバックパッカーです、普通の道を歩きます。路地裏なんかを歩きます。もう目にするのは、ごみごみごみ。それに大気汚染です。今声が荒れているのはつい最近までバックパッカーをやつていたこともあるのですが、わたしは海外に行くたびに、のどをやられます。気管支をやられて目も赤くなります。というのも、ゴミ、大気汚染、境破壊です。これはインドの牛ですが、インドの聖なる牛もゴミを食べて生きています。

これもゴミです(次ページの写真)。これはミャンマーです。すごいゴミでしょう。こんなところに住めるかと思ひうくらいある。これもミャンマー。へドロのようになつています。



インドもそうですし、アフリカもそうなのですが、プラスチック製品が大量に入ってきて、そういうものを処理するとかゴミ箱に捨てなければという概念がないところにそういうものを持ち込むので、みんな捨て放題ですね。昔、インドなんかは、チャイを飲むときは土で作った素焼きの器で飲んでいましたから、それは飲み終わったあととほいすればよかったです。土に帰りますから。プラスチックは捨てても分解されるのに、最低400年かかるらしいですね。そういうものが今世界中を覆い尽くしている。

アフリカの人はものがなくてかわいそうだとか、何か持って行ってあげた方がいいんじゃないかと、よく言われるんですけど、現地に行つてこんなにビニール袋がいつばいあるのに、これ以上持ち込んでどうするんだと。むしろ、わたしがビニール袋を持ち帰った方がいいと思うくらい、世界はプラスチックであふれている。これが、景観も住環境も、いろんなところを壊してきているなという印象を受けています。

大事なことは、まず、水と緑を守る。それから、ゴミを減らす。いらぬものを持ち込まない。現地の文化を尊重する。例えば、アフリカに行つたときのことですが、アフリカにはアフリカの歯ブラシがあるので、木の枝を使うのです。それを路上で売っています。それで歯をこしこし磨きます。その木の枝は特別な木の枝で、こすつている間に先が開いてくるのです。それで、こすつていると歯がものすごく白くなるのです。アフリカのひとは白い歯でにかつと笑っているイメージがあると思います。が、あの特別な木の枝でこするとぴかぴかの白い歯になるのですね。そ

ういうのがあるのに、先進国から歯磨きの文化を教えますといつて、プラスチックの歯ブラシをたくさん持って行きましたと。アフリカの人よ、医学的には木の枝ではダメだ、この歯ブラシを使いなさい。そう言つて彼らに渡します。それを彼らは使います。使わなくなつたら、かれらはそこらへんにぽいつと捨てますから、歯ブラシは次の400年の間そこから消えない。

現地のそれぞれの場所には、昔から自分達が使ってきたものがそれぞれありますから、さつき話しましたインドの素焼きの器もそうですが、そういうものをわざわざプラスチック製品に代えたり、こちらから持ち込んでこれを使え、というような必要は全くありません。

わたしたちにできること、見守りましょう

講演会などに行くとき若い方が、「わたしたちに出来ることってありますか」と、きらきらした目で訊いてくるのですね笑。これは答えるのは難しいですが、若い人がきらきらした目で見上げてくると、何か答えなければいけないだろうと、毎回何かできることないかなと探すのですが、一番大事なのは、見守ることだと思つています。というのは、そんなに手を加えなくてもいいので、まずは環境を破壊しない。それから、紛争を起こさない。世界つて、いろいろ紛争があつて、スーダンなどは危ない、イランは危ない、パキスタンは危ない、テロリストだらけだ等と言われていて、先進国の人間はそういう国を平和に導く使命みたいな

があるというような気持ちになつて、なにかどうにかしてやらなくちゃと言つたのですけれど、実はそういう国で起きている紛争のバックには必ず先進国の人間が絡んでいます。わたしたち先進国の人間が資源の争奪戦とかに加わらずに、なんにもせずに放つておけば、彼らは昔ながらの藁の家を作つて、欲しければ中でDVDを見ながら笑、生きていけるのですね。それを裏で取引をするので問題が起きます。とにかく手を加えない。

それから、いろんな武器。たしかに武器もたくさん見せてもらいました。そういう武器はどこから来ているのか。先進国から来ているのですね。アフリカの人達が藁の家の中で作り上げたマシンガンじゃないのですね。そういうものを先進国が持ち込むから、紛争にもなるし混乱も起きますし難民も増える。だから、武器を渡さない。

次に、資源を搾取しない。これはやらない方がいいと思つますね。よくわたしたちは資源のある国は不幸な国だと言つたのですが、どこかの村に先進国が入つてきました、そこで石油が発見されました。そういうことが起けると、突然その村だけ金持ちになる。その結果、他の集落が押し寄せてきて戦いになつたとか、そういうものをめぐる戦いが必ず勃発します。そういうものに先進国がいつさい手を触れなければ、彼らは地下にいろんなものが眠つているのを知らずに生活してきて、平和にやつてきたのだから、紛争など起ることはなかったのですけれど、資源がもとで紛争が起る。いらぬものを与えない、そこからのものを取らない、そういうことをすれば世界は相当よくなるのでないかと思つます。

旅をしていると、日本もそうだし、世界もそうだ、同じだなと思うのは、人間に欲があること。何かちよつともらうともつと欲しくなる。イタリア人の小学校の先生がいたのです。その人は小学校で教えて、学期末になると、子供達はいらなくなった色鉛筆を学校に置いて帰ってしまふのです。色鉛筆がたくさん余るから、もつたないからと、アフリカに行つてアフリカの子供達に色鉛筆をあげた。次の年、また、色鉛筆を持って行つたら、アフリカの子供はあまり喜ばなかった。色鉛筆でなくて、もつといい、マーカーのようなものを欲しい。三回目に行つたときは、もつといいものが欲しい。結局行き続けると、どんどんどんどん欲しいものがグレードアップしてくる。最後に言われた言葉が、「金を持つてこないのなら来るな」

もし、最初、あの色鉛筆を持って行かなければ、人と人として付き合いをして、彼らは彼らなりのもてなしをしてくれて、多分いい関係が築けたのですけれど、最初に色鉛筆を大量に与えてしまった故に、もつと欲しいもつと欲しいになつてしまった。そういうことはしよつちゆうあるので、安易にものをばらまかない。

それから、プライド。

この歯ブラシの方がアフリカの歯ブラシよりいいですよと、渡すとその村の村長さんがすごくいやな顔をします。というのは、自分達のやりかたでやっているのに、なんで他の人が入ってきて指図するのか。村には村のやり方があるので、腹が立つのですね。わたしたちは合理性を追求するのですけれど、それ以上に、なんだかんだいって、プライドが

あるのですね。これは先進国でも絶対あるし、途上国でもある。プライドを傷つけない程度にしか介入は出来ないことを知っておいた方がいいと思います。

それから、嫉妬心。これはわたしもあります。欲と嫉妬心はたくさんあると思いますね。チベットを旅行していて、韓国人の男の子と一緒に旅をしていたのですが、集落で一人女の子が出てきて、ペンをくれといったのです。ペンをくれとか、金をくれとかいう子は途上国にはたくさんいるので、わたしはもちろん、ノーで絶対あげません。ただその男の子はまだ旅を始めたばかりだったので、親切なことをしてあげなきゃと思つたのでしょね、「うんあげるよ」と、韓国のとてもない。ペンをその子にあげたのです。その子は家に帰りました。わたしたちは山歩きをしたあと、またそこに帰つて来た。そしたら、集落中の子がわーと押し寄せてきて、同じペンをくれというのですね。その集落の子供が学校でもらえるペンと、その韓国のペンとはすごく違うので、その韓国のペンを持っている子とそうでない子の間に格差が生まれ、そうすると絶対嫉妬します。それでけんかにもなる。韓国の男の子は、親切であげたのに格差を作り嫉妬心をおおってしまった、申し訳ないことをした、とその時点で気付いた。

こういうことは往々にありますので、例えば、どこか一つの学校だけをものすごく援助して、援助は必ずしも悪いとは言いませんが、すると隣の学校は、なぜあそこだけあんなに貰つたりするのだ、となる。今、日本は復興の途上にありますが、どこか一カ所だけ貰うと隣が嫉

妬するとかは、人間社会にはものすごくあることなので、このことをふまえた上で行動しないと、どれだけこちらが善意だと思ってやったことでも、逆に混乱を招くということがたくさんあります。

分析と反省とお手伝い

大切なことは分析と反省とお手伝い。地域や個人によって必要なものは違ってきますので、地域や個人による違いを常に分析する。例えば、わたしが日本国内において、インドもアフリカもパキスタンもラオスも、みんな同じものが必要だろう、これがあるだろうと思いきいで、わっと押しかけて持つて行っても、もちろんニーズは違います。個人一人一人を取っても必要なものは違ってきますので、そういうものを注意深く分析・観察することが大事です。本当に助けを必要とする分野は、医療や衛生、環境整備ですね。こういう生活の基礎になる部分はある程度援助する必要があると思います。

やりっ放しの協力、あげっ放しの物資はやめるということですね。例えば、集落で女の子にペンをあげてしまった事例では、わたしたちはペンをあげて、山に登って、帰って来て、そのとき子供の間に嫉妬が起きていることを知ったのですね。もしわたしたちが、ペンをあげて、山に登って、そのまま次の町に行っていたら、自己満足で、ああいいことをしたなあの子は喜んでいたな、で終わりなのです。もう一度戻って、それが本当に役に立ったのか、本当はダメだったのか、そういうことをもう一度

調べ、事後報告するとか、結果の分析をするとか、そういうことが必要なのですね。

それから一番重要なのは現地の自主性、自発性にゆだねる。例えば歯ブラシでも、「使ってみる？」と聞くのはいいと思います。例えばアフリカで「石けんを使って手を洗ってからごはんを食べた方がいいと思うよ」と、提案はできると思います。ただ、それを押しつけたりはしない。現地の人が「石けんか、使ってみようかな」と思うなら、使ってみればいいし、その代わり使った以上はこういうことが起きるよと教えて、それで使うのはいいけれど、一方的にこうしろ、ああしろと言って持つていったものは、だいたい、結果的にはうまく活用されないのが多いと思います。

自主性ということはこの写真を見て欲しいのですが、これはスーダンの女性でお店をやっている人です。この人、夫が無職で子供が四人いるのです。自分でお茶屋さんをやって、コーヒーとかいろんなおいしいものを入れてくれるのですね。そうして生計をたてています。わたしはこういう女性が大好きです。このひとは大変な状況で子供さんも四人もいるのですが、売春になるのでもなく物乞いになるのでもなく、お茶屋さんでやっていこうとしてやっています。もしわたしが、「夫が仕事できなくてかわいそうですね」と言って、お金を置いていきますと言って置いていったとします。そのお金で一ヶ月生き延びることができるとも知れない。そのあと、お金が尽きたらその人は終わりなのです。もし彼女が自分からお店をやりたいと言ってやればお店が続く限り彼女は生きて

いける。こういう自発性を持ってやっている人、こういう人を見守って、必要であれば少し応援していく、そういうことが必要だと思います。



「この人はモザンビークのお母さんで子供が四人、飲食店をやっている。子供達もそこで働いている。「アフリカでは子供四人は少ないですね、最低六人くらいは産むのでしょう」と言ったら、「いやいや、四人でいいよ」。「アフリカでは珍しいのではないか?」と言ったら、「子供にいい教育を受けさせたい、お店を大きくしたい、若い女の子達を一人前に育てたい、だからハズバンドにはノーと言った」と言っていました。お母さんは

しっかり人生設計をして、自分で計画して自立してやっていく人としている。わたしはこういう人を見ると、子供を作って物乞いしている人を見るより、こういう人を応援したいし、こういう人が伸びてこない、途上国の底上げ、経済力の底上げ、にはならないだろうなと思っています。

世界の素敵な小話

あと三分ほどですので、世界の素敵な小話をして締めたいと思います。このおばあちゃんはわたしがチベットでヒッチハイクをしていて出逢ったおばあちゃんです。このおばあちゃん、トラクタールに乗って走っていたのを、わたしがヒッチハイクをして乗せてもらったのです。そこでは乗り物は、ロバかトラクタールだったのですが、本当はロバの方がよかったです。トラクタールが来たので値段交渉をして乗せてもらい、町まで行きました。

次の日、バスもトラクタールもロバもすべて失敗したので、もう歩かないということ歩き始めたのです。途中でものすごくつかれてしまったのです、何10キロという距離なので。くたくたになって、物陰で休んでいたら、おばあちゃんがまたでてきました。「ああ、昨日のおばあちゃん、!」。そしたら、おばあちゃんが、うちによつていらっしゃいと言ってよんでくれたのです。おうちにおじゃまして、そのおうちがものすごく貧しいおうちなんです。何にもなくて、他に老婆がいて、その人は

数珠を持ってひたすら祈っているだけのおうちだったのですが、よんでくれたおばあちゃんはむちゃくちゃ明るいおばあちゃん、意味の分からないギャグを言って一人で笑うのですね(笑)。

その家には食べ物もないし、中国だけのお茶もなかったように思いますが。家にあるポットや茶碗はさびびいたり手垢が付いたりしてきかないのです。そしたら、おばあちゃんが、にやーと笑いながら、真つ黒で手垢の付いたお茶碗をぼろ布で拭き出したのです。ずーと拭いていて、拭き終わると、白くてぴかぴかのお茶碗に戻ったのですね。そしたら、そこに、おばあちゃんはお茶はないけど、白湯をついでくれた。白湯をいっばいご馳走になって、わたしは旅を続けました。そのときの白湯のことは今でも鮮明に覚えています。

世界もそうだし、日本もそうですが、もてなし。豪華な食事とかいろんなプレゼントとか、もらったこともありますし、すごい接待を受けたこともあります。数えるほどしかありませんが。一番心に残るのは、わたしにとってはこのおばあちゃんの白湯だったなと思います。このおばあちゃんから人をもてなすことを学んだと思います。皆さんに必ず白湯をだせと言っているではありませんが(笑)、皆さんの持てるもので最大限のもてなしをされるのが一番心に響くのではないかと思います。

時間ですので、とりあえずここで終わりたいと思います。(拍手、大)

講演後の質疑応答

早川 面白い話なのであつという間に一時間が終わりました。これから一時間半、なんでもありですので、せっかくの機会ですのでいろいろ聞いていただきたいと思います。

言葉、友だち

参加者A 何カ国語しゃべれるのですか。こうやっていろんな国を旅行していくのに、どうやって会話しておられるのか。

中村 わたしは大学時代をアメリカで過ごし、英語と日本語だけです。この二つの言語でいたい旅行はできるのですが、たまに、例えば、旧ソヴィエト連邦の国に行くところにはロシア語圏ですので、ABCやイエス、ノーが分からないのですね。そういう世界に入ったときは英語はあきらめて、ジェスチャーとか、あとは簡単な言葉だけ覚えておきます。「これいくらですか」とか、「トイレ」。あとは、ジェスチャーだけで回れます。今は、だいたい世界中どこも英語をしゃべりますね。西アフリカはフランスの植民地だったので、フランス語ができるとさらにいいですね。現地を旅していると、簡単な単語はだんだん覚えるようになってくるので、たとえば、「250円(現地の単価になります)」等は、何回も何回も使うのでそのまま塊として入ってきて身についてくるので、それを繰り返しながらやっていきます。言語に関しては、そんなに難しくないとあります。

参加者B いろんな方とお知り合いになって旅しておられますが、僕な

ども海外を旅して友達を増やしたいなと思つていますが、友達を増やすようなアドバイスがあれば。

中村 わたしはもともとアメリカに留学していたときは、なかなか友達ができなくて、言葉の壁もありましたし、それで、すごく苦労したので。生まれて初めて、いじめられっ子の気持ちも理解できたかなというような状況もあつて、どうやつてひとと知り合つて、どう向き合つていけばいいのか、それはこの十年くらいの大きなテーマだったのです。

旅をして一番効果的というか、身についたことは、ひとと向き合つたときに力を抜いて時間をかけるということですね。すぐに友達になるとか、すぐに通じ合うとかは難しいし、一方的に話しかけたりしても相手は心を開いてくれたりしないとおもうので、とりあえず同じ時間を一緒に過ごす。わたしはよくだらだらした方がいいよと言うのですが、わたしはお茶屋さんとかに座つて何時間もだらだらするのです。中にはあまりしゃべらない人もいるし、おしゃべりな人もいますが、おたがいしゃべつてなくても、たまににやつと笑つたりしてずっと時間を一緒に過ごす。そうしているうちにしゃべらなくても一緒にいられるし、しゃべつていても一緒にいられる、そういう心のゆとり、許し合いみたいなことが起きてきて、それで仲良くなりますね。

初対面で「ハイイ」とか握手して友達になつていくとか、いつも決めずりふで落とすとか(笑)、そういうのはなくて、けっこう時間をかけますね。相手が自分に全く興味がなかったら、もうそれは無理なので追いかけません。相手も何となく心地よくいるのかな、という感じで、わた

しも何となく心地よく、しゃべつたりしゃべらなかつたり。いつしよにいただけでいいよね、という感じでいつしよに時間を過ごしていつの間にか仲良くなつていくという人はたくさんいますね。

参加者B それは日本の中で友達を作るのかわらないのですか。

中村 かわらないです。

参加者B 特に気をつけることなどありますか。外国に出て、どこかの国だからどうこうのだからとか、そういうことはありませんか。たとえば、これは言つてはいけないとか、そういうことを念頭に置いて接しておられるのかなと思つたのですが。

中村 海外のひとだからというので、念頭に置いておくことはないですね。わたしにとっては、逆に、日本で誰か初対面のひとと話すときの方が、マナーがありますから、気を遣います。日本は相手がどういう人かどういふ地位にいてるかで、接し方を変えなければいけない世界だし、相手もわたしが日本人というのを分かっているんで、それを期待している。特定の対応や振る舞いを期待しているということで、そういう風になりますけれど、海外にいるときは、もういつも白紙の状態で、あまり気にせずそのまま真つ直ぐですね。

参加者B それが一番いいですか。

中村 そうですね、まあ力を抜くことでしょうね。無理に友達になることはないと思うので、本当に気の合う人とかいい人だけが残つていけばいいと思う。一生懸命友だちみたいないな感じにはなつたけれど、という人とは、結局消えていってしまうし、生理的に自分も好きでなかつたら

どうしようもないので。わたしはいろんな人と会うんですけど、その中で今でも仲良く残っている人というのは、ごくわずかです。友達は無理に作るものではないと思う。

危険と危機管理能力

参加者C 最近聞いた講演で、スーダンですさまじい経験をされた方の話を聞いたのですが、中村さんは経験された中でも危険だったというのがありますか。

中村 うん、わたしは基本的には危ないところに行かないので、あんまり危ない経験はしていないのですが、一回ジンバブエという国で殴られたことがあります。現地で知り合った日本人の旅行者、男ふたりと女ひとりとわたしの四人で夜道を歩いているときに、ジンバブエの男性五人ぐらいに囲まれて、殴り合いになりまして、流血事件でしたね。顔を思い切り殴られて、眼鏡は吹っ飛ぶわ、口の中は切れるわ、ということになったのですが、そのとき思ったのは、やっぱり自分が本当にアホだったわ、ということですよ。

普段は、わたしは基本的には夜は外に出歩かない、危ないところには行かない。そのときは、ジンバブエはものすごく危ないといわれていて、その夜の通りで、日本人の男の子が二人もいるのだから安全だろう安心だろうという気の緩みがあったんですね。何となくみんな外でごはんを食べて、宿に帰る途中に襲われた。自分が気を抜いていたからこそ

やられたということ、反省すべきことなわけです。

よく事件などに巻き込まれるのは男の人の方が多いですね。女のひとは、けっこう、安全なものです。「女一人で旅してます」というと、「へー、危なくないですか、女一人で」と言われるのですが、わたしは、女一人だから安全だと思っています。男の人というの方が危なくらいに思っていて、生活していてもそうだと思いますが、女の方が危機管理ができていると思うのですよ。

日本でも、女の人が危ない夜道を一人でハイヒールを履いてコツコツ歩かないじゃないですか。危ないから、というようなセンサーがあるので、海外でもそれは普通に働きます。へんな酒場とかネオン街とか、わざわざ夜中に女一人で出歩いたりしないのですけれど、男の子たちはそういう所に入りするので、意外と事件に巻き込まれたりしている。ビール瓶で頭を叩かれて縫ったとか。それは危機管理能力の問題なので、慣れてきます。相手がどういう人なのか、だまそうとしているのか、危険な人なのか、ということは旅をしているとだんだん分かるようになります。最初の頃はそれがちょっと分かっていなかったこともありましたが、戦争の火中に入るとか、そういうことでもないと、本当に危ない経験はできないと思います。

あと、危ないと思うのは交通事故です。海外でわたしが死ぬとしたら、確率的には交通事故が一番高いですね。銃で襲われるとか、流れ弾に当たるとか、そういう可能性はとても低いし、変なトラブルに巻き込まれてどこかに連れ込まれて殺害されるとか、そういう可能性もなし、

毒を盛られるというのもちろん匂いをかいで飲むし大丈夫です(笑)。ちよつと先に小指に付けて味見するとか(笑)。

だいたい、怪しい人というのは早口ですね。相手はわたしをだまさないければいけないので、焦っているのです。こっちがゆつくりゆつくりすると、よけいに向こうはこの毒の入ったクッキーを食べると思っているから(笑)、話がすごく早口になるのですよ。最後には食べないと。二人でいるときは、わたしの方はおなかの具合がわるいのでと言って毒味してもらつて、いざとなつたら片方が担いで逃げられるからと、そういうブランクスを取つたりしながらやつていますが、そういうので犯罪に巻き込まれるとか命を落とすということとはきわめて低くて、あとは、災害等に合う可能性もきわめて低いと思います。交通事故は確率が高いので、日本に帰つてこれなくなる可能性はあると思つて旅しています。

歓迎される

早川 最初からお話を聞いていると、「うち、泊んな」と声を掛けてもらつて、すすいと泊まりに行くようなことがたくさんありましたが、あれは声を掛ける方は中村さんに何を期待しているのでしょうか。何を期待して、泊まりなどいうのでしょうか。

中村 旅をしていて、言われませんでしたか。

早川 言われました。

中村 まず、好奇心。外国人のお友達を作りたい人つて、世界中にいっ

ぱいると思うのですよ。わたしは、日本人で女でしょう。さつき犯罪の話をしましたが、怪しい人つてだいたい男ですよ(笑)。女でこうやつてバックパック担いで、道歩いていて、現地の人にはわたしが向こうに何か危害を加えるとはまず考えないですね。「日本から来た人か、この人と友だちになりたいな」とか、「何か話しかけたいな」とか、「英語の勉強してみたな」。

そういう単純な理由で、おいでおいでみたいな感じで。まあ、普通の人には、付いていつてしゃべつたりお茶を飲んだりして、さよならという感じで終わると思うのですが、わたしはただただらだらするのが好きなので、時間を掛けるのが好きなので、お茶飲み終わったのに、このお姉ちゃんいつまでいるんねん、という感じで、二杯目のお茶をもらつてしまつて、などとしているうちに、「今日まるどころどこなん」となつてしまつて(笑)、ええーといいながらくつついていつて、いつの間にか紛れ込んでいたというのがけっこうあります。

参加者D わたしはダンスが好きなんですけれど、ダンスで歓迎されたことはありませんか。

中村 あります。

参加者D いっしょに踊つたりするのですか。

中村 絶対いっしょに踊らされます(爆笑)。拒否できない(笑)。踊るといえば、アフリカですかね。アフリカの人には、本当に踊りますね。特に、西アフリカ。ガーナのことですが、イベントがあり、いまからパフォーマンスが始まるというので、なにかガーナの踊りがみれるのやわ、と楽しみ

にしてその会場に行くでしょう。すると、会場に音楽だけ流れ出すのです。パフォーマンスはいつこうに出て来ない。すると、まわりの人が、わあわあとおどろいて出てくるのですよ、どこどこ夫人というような、ハンドバッグを小脇に抱えているようなおばさんたちが、普通にうわーと出てくるのですよ。男の子も子どもも出てきて。パフォーマンスが出てくるのを見るのでなくて、みんなが踊って、音楽が終わるとさっさと引いていくのです。そして、しばらくして、また音楽が鳴り出すと、一人二人と出てきて踊り出すのです。結局、みんなが踊って、特定のパフォーマンスはなかったのだね、とそういうのがありました。

ウガンダの孤児院にいくと、子どもたちが歌と踊りで歓迎してくれる。むこうの子は本当にドラムがうまいし、リズムの中で生きている子たちだから、日本みたいに整列して歌ったりしないんですけれど(笑)、ちよつと大きめのお兄ちゃんなんかむつちやうまいですよ、ドラムが。ドラムに合わせて、踊りながら歌うのですよ。いい声で。「我思う故に我あり」という言葉がありますが、アフリカ人は「われ踊る故に我あり」というくらい、踊るということが、歌うということが重要みたいです。すごくいい文化でわたしは大好きです。

高校時代

参加者E 中村さんの高校生の時の夢って何ですか。

中村 高校生のときの夢？ 高校生時代が一番混乱していましたね。

ただ、中学校卒業するまでは、絶対に海洋生物学者になろうと思っていた。動物とか魚とかが異常なくらい好きで、家中動物だらけだったのです。図鑑を見たり、生物系やバイオ系の雑誌を見るのも好きで、穴の開くほど読んでいたので、絶対それに行くと思っていたのですけれど、中学校を卒業する頃に、わたし三重県のど田舎出身なのですが、その三重県に黒柳徹子さんが来たんです。「キユリー夫人」という演劇があつて、それを、叔父が行けなくなつたからといつてチケットをもらつて、見に行つたときに、ものすごいおしゃべりな黒柳さんがいたのですよ(笑)。こんなにバイタリティーのある女のひとつて、そんなおしゃべりなひとつて、三重県には、まわりには、いなかったのですよ(笑)。こんな人がこの世にいたんだと思つて、それまではじつと自分の研究室に籠もつて研究して、できれば船に乗っているんなものを捕まえていってと、しか考えていなかったのですが、ひとと話をするのも面白いかなと思つて、高校時代はいろいろ考えました。高校時代はこれといった夢はなくて、数学はできないわ、といつてつぶしていくと最後に残つたのは芸術系だけだったので。

大学は舞台芸術を専攻していま何年か経つたので、高校時代に絶対になりたくなかつた職業が作家だったので(笑)。だから、自分の運命なんか本当にわからない。字書くのは大嫌いだったし、絶対に作家だけはなりたくないと思つていたのがなつたし。参考にならない話でごめんなさいね(笑)。

旅の健康管理

参加者F こんにちは、世界の旅、ご苦労さんでございます(笑)。女性で世界を旅するということはいろんなことがあつて健康管理が大切だと思ふのですが、どういうふうな健康管理をされているのか。薬とか、漢方薬とか、自分はこういうものを信じて持つていくというふうなものがあれば、自分もこの年ですが海外旅行に行くチャンスは大いにあるので(笑)、参考になることを、経験されたことを、ちよつとでもお話しを聞けると嬉しいな思います。

中村 かしこまりました。わたしも出発するに当たつて、薬局に行きまして薬も大量に買って持つて行ったのですけれど、はたしてそれが役に立ったかというと、役に立っていないのですね。役に立ったのは、とりあえず予防注射。A型肝炎とか黄熱病とか、そういうのは打つていきました。持つて行った薬の中で正露丸は全く役に立たなかつた。持つて行かなくてもいいです。全く役に立たなかつたにもかかわらず、捨てたにもかかわらず、ヨルダンで途中物資を受け取ることがあつて、その中にまた大量に送られていて、とても困りました。正露丸はいりません。

最初の一年はずつと継続的に下痢でした。体重も落ちて、相当大変なことだったので、ばい菌が入り、免疫力も落ち、変な虫もいたのでしょうね。そのとき一番何が効いたかというところ、現地で処方してもらふ薬なのです。それまではなんとか菌が足りないからだろうとヨーグルトを食べてみたり、おかゆを食べたり、日本の正露丸も飲んだし、下

痢止めも飲んだりしましたが、全く効かない。最終的に、インドでへろへろになりまして、薬局に行った。なんとかゾール、と名の付く薬が四種類くらいあつて、それは中近東やインドの薬局に売つていまして、それを処方してもらつて一個飲んだらびつたと止まりました。そのあとはシリアとかに行つても、なんとかゾールを確実に処方してもらえるので、下痢になつたときはそれで止めると。

アフリカに行くと、今度はマラリアの問題があつて、マラリヤは予防注射ができないので、予防薬を短期の場合飲むのもあります。メフロキンといういい予防薬があるので、それは現地で売つていまして飲めばいいのですが、飲むと平衡感覚が悪くなるのですね。バックパックを担いでいくとずつとかしいでいく感じで(笑)、バスを降りたらずつとかしいでいるなど(笑)。わたしは長期でしたのでこれは飲み続けるのはできないと思ひました。メフロキンは予防薬にもなるし、治療薬にもなります。わたしの場合は、罹つてしまつたときは病院にたどり着くまで、そのネフロキンを決められた時間毎に飲んで行くと。そういうのは現地で調達するのがいいですね。

マラリアで一番大事なのは蚊にかまれないこと。とにかく長い靴下をはいて、だいたい足首をかまれますから、裾を全部靴下の中に入れてガードする。それから蚊帳です。わたしは蚊帳を持つて移動していました。わたしは幸運にもマラリアにも罹らずに旅を終えることができました。

これは本当に誰にも信じてもらえないですが、精神的に罹ると思つた

病気には罹るし、罹らないと決めたらもう罹らない(笑)、いうことがあ
るようです。というのは、一年下痢をしたときに、もうわたしは下痢に
はならないと決めたのです(笑)。もうならんぞと。この食べ物を食べた
ら下痢になるのではないかなとか、きたないかなとか、ばい菌いるかなとか
心配して食べると下痢になるとみんなに言われたのですね。旅人はそ
ういうことをけっこう言うのです。だから、アフリカに渡ってから、生
水もがぶ飲み、バケツの水も飲む(笑)、手も洗わずにごはんをわしづか
みに食べる、はえが落ちたスープも飲む。絶対わたしは罹らないから
と、やり続けた。ただ一回アフリカで魚の乾物を丸かじりしたとき、腹
が立っていたのでマーケットで買ってがーと食べたなら、さすがにピーとき
ましたが、それ以外は一年間下痢ゼロです。だから、精神的に絶対罹
らないと決めてかかる、それもありのようです。

解熱・鎮痛剤は日本から持って行ったほうがいいと思います。あと目
薬。途上国は大気が非常にきたないので、目薬は持っていった方がいい。マ
スクがけっこう役に立ちます。マスクはたくさん持って行きました。緊急
の時のストッパー、下痢をピタと止める薬。わたしは使ったことではないの
ですが、バスの中や飛行機の中で変なばい菌が突然アタックしてきて、
もうピーと来るかも知れないので、一応バックパックには入れてありま
す。それくらいで、わたしは胃は強いので他には何も持っていません。

印象的なひと

参加者E ふたつ訊きたいのですが、ひとつは今まで会ったなかで一番
印象的なひととはどんなひとだったのかということと、それからこれから
行きたいところはどこですか。

中村 印象的なひとですか。基本的には変なひとばかりなので、印象
強すぎて忘れちゃうくらいですよ。ああ、この人にはあつてないのです
けれど、同じ町に来ていた女の子で、ウズベキスタンの町ですが、すごい
長い旅をされているのですって。だけど、ちっちゃな風呂敷に服を包ん
で入っていて、ちよんちよんのミニスカートをはいて、杖をついて歩い
ているって(笑)、その人に会ったと、ある人から聞いたので、その人を
探しにいったけれど会えませんでした、そのひとが一番変なひととし
ては残っています。日本人です。

本の中にも出てきますが、ロシア人で一銭も持たずに八ヶ月間ずっと、
東南アジアからモスクワまで無銭で行こうとしていた人ですね。中国と
キルギスの国境で会ったのですが、もちろん、彼は一銭も持たずに歩い
ていますから、テントで寝泊まりして、食べ物は施して手に入れてやって
いるひとで、彼のことですごく憶えているのはふたつで、眼鏡がボロボロ
だったのですよ。漫画に出てくるような、ちよつと触るとボロボロと崩れ
そうな眼鏡をして、歯もぼろぼろだったのですが、わたしよりひとつく
らい上の、まだ若いひとだったのですが、そんなぼろぼろの眼鏡を掛け
てそんな歯をしてと。彼のことでもうひとつ憶えているのは、すごく臭
かったのですよ(笑)。バックパックは特有の匂いがありまして、みんな
あまりお風呂に入らないものですから。その一番強いのが彼だったと

いう。

強烈な個性のひとつというのは……うーん、みんなそれなりに変なので、一口で言うのは難しいですけど、海外のひとつで今でも仲良くしているひとつというのは、異文化に対して広い心を持っていて、決めてかからないひとで、話すペースが自分に近くて、ひとの話話を聞いてくれるひとですね。

さっきの友だち作りの話の中で思ったのですけれど、大別すると世の中二種類のひとがいたなあ。わたしがすごく仲良くなるのは、話しをよく聞くひとですね。むしろがどんなにかつこよくて、美しくて、面白くても、その人の世界だけで話しているなと思うのは、取っつきにくい。最初であったときに、こっちが話そうとしていることに耳を傾けてくれたひとというのは、こっちも嬉しくなると、相手のことを聞こうとしますし、そういうひとは自分の中で残って、長いおつきあいになって、今でもおつきあいがありますね。

一二目の質問、行きたい国はアフリカのコンゴかな。今年中に行けたら行くかと思っていますが、ビザ代が100ドルするのとフランス語圏なので。英語でもまあコミュニケーションできますし、フランス語も片言でやればいいんですけど、英語圏ほどは深くは入れないと思います。あとは体力的な問題で、だんだん年も取ってきますし、ハードな旅が面倒くさくなってくるのですが、そういうこともありますが、アフリカのコンゴには行っておきたいと思っています。

ブラジルにも行きたいですが、これは音楽を聴きたいので、踊って音楽

を聴くためだけに行きたいです。いっぱいお金を持って、貧乏旅行でなくて(笑)。

バックパッカーの荷物

参加者H バックパックで旅行しているということは、荷物はものすごく少ないと思うのですが、本当に必要な荷物というのはどんなものがあるのですか。

中村 わたしが絶対に持っていくものは、スリーピングバック、寝袋ですね。寝袋は絶対いいのを持って行った方がいいと思います。最初の旅行で安いのを持って行ったのですが、寒いときにはいい寝袋があるといいです。それから途上国の布団はものすごくきたないので、肌に触れるのがつらいようなお布団がけっこうありますので、寝袋があるといつも自分のお布団で寝られるということ、寝袋は持っていた方がいいですね。

それから、さっき話していた薬。目薬は日本から持って行った方がいいと思います。それ以外の薬は現地で調達する。それから、デジタルロック、鍵です。海外で荷物をどこかに置いておくときは、デジタルロックでふたが開けられないように、バックパックもミニバックも全部鍵を掛ける。日焼け止めも絶対持って行きます。男の方はいらなくても知れないけれど、日差しは日本の感覚では想像もできないほどなので、日焼け止めや帽子は、それにサングラスもそうですが、絶対にいります。砂漠では

目も開けられないほどなので、濃いサングラスをしていても目に刺さってくるような感じですよ。標高が高くなると紫外線が強くなり、目に刺さってくるので、そういうところでも絶対必要です。

あと、必ずいるのはビーチサンダルのようなスリッパ類ですね。途上国の安宿に泊まると、お風呂場は共同でトイレと一体型で、とてもきたないの、そんなところに裸足では絶対に行けない。ビーチサンダルをはいて全身を洗ってそのまま出てきていつの間にか乾燥しているとなるので、ビーチサンダルはすごくいいと思います。毎日重宝します。

相当きたないエリアに行くときは、南京虫対策にビニールシートを持って行く。それから、虫除けスプレー。わたしは、本当に、虫がイヤなんです。あまり怖いものはないのですが、虫にかまれたときだけは、もう旅が続けられないのではないかと思うくらい強烈なんです。日本の蚊の、10倍のかゆさですよ、南京虫にかまれたときは。

あと、地図を持って行きます。場所によってはテントも持って行きます。一人用のテントを持って行って、キャンプ場なんかでテントを張らせてくれて、安くで泊まれます。シャワーは共同で使えるので、そういう所にはテントを持って行くこともあります。

パソコンは絶対持って行きます。iphone なんかに便利だと思えますね。今は、どこもかしこも、本当によく繋がります。ワイファイコネクションがどこにもあるのですよ。相当の僻地に行かない限り、そういうワイファイから離れられないくらい、どこもかしこも電波が飛んでいるので、活用したいひとは活用するのいいと思いますね。仕事柄、原稿を送った

り、データを取ったりしなければいけないので、パソコンを持って行ってつないでいます。次の町の宿を検索するとか、そういうのもできます。

あと、お守りを持って行きます(笑)。わたしは必ずお守りを持って行きます。

(会場から、どこのお守りですか)

チベットの僧侶にいただいたお守りで、しょっちゅう安い飛行機を使っている、変な飛行機にも乗っていて、飛行機にもいろいろあるんですよ。わたしが死ぬときは事故で死ぬと思いますが、車の事故か飛行機かと思っている、飛行機が離陸するときはお守りを持っています。

あと、水をきれいにする浄化剤があるので、緊急用として持って行きます。それから、注射針も病院によっては使い回しをするので、アフリカだとエイズに感染することもあり得るので、注射針を持って移動しています。

獣害

参加者1 水が非常に大切だという話でしたが、世界を旅されていて日本が水の資源国であり、植林が大事であるといわれましたが、世界を回られていて、ここらは獣害でたいへんなのですが、そういう獣害で悩んでいる国はあったのかどうか。

中村 獣害については、途上国ではそういうのはほとんどありません。

ただ、アフリカなんかでは、たとえば、ボツアナだと国立公園で狩猟が禁止されていて、象ばかりが増えているというようなことは聞きました。それ以外はどちらかというと、動物は減っていつている傾向にあります。

ラオスでは内戦で相当食べ物がなくなって、木も切りまくって、大変な状態になって、最後の最後にはねずみとか家の回りにいる動物を全部食べないと生きていけなくなったみたいですね。ラオスを旅していると、「これは何の肉なの」といようなものが串に刺さって丸焦げになって出てきたりするのは。鼠の毛をむしらずに丸焼きにしたのだとか、ちよつとちよつと思いつながら食べたり。カンボジアでは蜘蛛がでてきました。食べて食べて食べ尽くしていくと動物はどんどん消えていきますので、途上国では動物は消えていくほうだと思います。獣害が起る方がいらいだと思えます。日本のちよつとありがたい悩みみたいな。

ジンバブエに着いたときに、あるホテルで象とかカバが食べられるとして、わたしは象とカバはお友達の圏内にいると思ってるので食べなかったのですが、張り切つて食べにいった子なんかいました。「象なんて食べてもいいの」と訊くと、それは国立公園で増えすぎる象やカバを間引きしていかなければいけないらしいです。象なんか撃つと大量の肉が出るので、それをレストランで使っているということでした。

危険を避ける

参加者J さつき菓を飲まされた話がありました。そういうことはよくあるのですか。

中村 ああ、そんなにしょっちゅうあることではないと思うのですが、そういう経験をしたひとには会っていますね。トルコのイスタンブールにいたとき、地下鉄に乗って大使館に送られてくる物資を取りに行こうとしていたら、日本人の男の方でへろへろになっている人がいたのですよ。声をかけて、「日本の方ですか、日本語しゃべれますか、大丈夫ですか」と言ったら、「はあ、はあ」という感じで、「僕今から大使館に行きたいのですけれど、昨日も大使館に行ったのだけれど、全くどうやって行つたらいいのか分かりません」というのですよ。「ああ、わたし今から大使館に行きますから、一緒に行きますよ」と言つて、一緒に行つたのです。聞いてみると、そのひと、イスタンブールの栈橋の所で黒人の男の人に声をかけられて、「おいでよ、いっしょにあそぼうよ」と言われて付いていって、睡眠薬を入られたクッキーを食べて、昏睡状態になった。目覚めたときには貴重品などすべてなくなつていて、それでふらふらの状態で大使館に駆け込んで、クレジットカードを止めるとか、そういう手続きをしなければいけないので、大使館には行つたのだけれど、それは前日のことで、今日も手続きのことで大使館に行かなければならないけれど、前日、菓でやられていたので、どうやって大使館にたどり着いたか分からないと言われた。地下鉄の中で迷っていたのですね。

さつきのお友達作りの話に戻りますけれど、あんまり海外のことに慣れていないひとが海外に出ていって、そうするとやっぱりお友だち作

りたいですね。海外のひとに声をかけられて仲良くできたらうれしいです、一人で旅をしていたら孤独だし。それで、付いていつて言葉もそんなに分からないし、海外になれていないから心の余裕もない。それでだまされてしまう、そういうケースはかなりあると思います。

だから、じっくりだからなら時間をかけてひとを見極めるといっては、実かは、心の余裕を持って視野を広げて、じっくり相手がどういう人であるか見極めることなので、日本を出てきて、ガイドブックを見て、ここは初めて歩きました、右も左も分かりません、英語でしゃべりかけられたらどうしよう、などという状態で、見えるのは自分の周辺だけという状態で旅されているひとは、イスタンブールなどのメジャーな観光地にはいらつしやるのですが、そういう人は見たらすぐ分かります。犯人たちも道でそういうひとを見かけたらすぐ分かるはずですよ。向こうも確実に狙ってくる。

昔、いろんな事件に巻き込まれた男の子がいるのですよ。いま、33才くらいだから、若い頃に巻き込まれたのですが、その子が言っています。「昔、旅していた頃は大学生で、茶髪で短パンはいて、出てきたぜ、みたいな感じでぶらぶらやっていて、その頃はやっぱり変なお兄さんから声をかけられた」と。今は、彼はもう普通の髪型でぱりつとしたTシャツを着て、見るからに経験しているなというバックパッカーの装いなのですね。変な言葉はかけられなくなつたと言っています。彼の昔もパスポートを見せてもらったら、ああこれではかもられるわ、見た目からして（笑）。

あと、保険金詐欺になつた友達もいます。インドで風邪を引いて気分が悪いと宿のオーナーに言ったら、病院を紹介してあげると言われて、行つた先の病院で点滴を打たれたのですけれど、それが睡眠薬であつて三日間ほど目覚めなくて、気がついたときに、「なんでこんな針ささつているんや」、カレンダー見たら「三日、進んでいるわ」というような状態で、慌ててがばつと起きて、日本の保険会社に電話したら、「その病院は日本でもブラックリストに載っている病院やから、とにかくパスポートだけでもつて逃げなさい、お金はいいから」と言われたんです。けれど、三日間寝ていたから足がふにやふになつて、走ろうと思つても走れない笑。必死になつて逃げたみたいです。そういう詐欺には若いうちは巻き込まれるひともいますけれど、宿のオーナーも怪しいというのは、経験で分かるようになりますね。

旅の装い

参加者K 海外に女一人でいくとき、バックパッカーでなくてもいいのですが、どんな服装が無難なのでしょう。一時、赤とか黄色とかだめだと聞いたことがあるので。こんな格好でいけば、まあまあトラブルには巻き込まれないよ、というような服装は？

中村 いい質問ですね。わたしはこの火曜日まで東ヨーロッパでバックパッカーやつていて、帰つて来たばかりなのです。今年四回ばかりバックパッカーやっていますが、全身ピンクで行っているのです（笑）。ユニクロのピンクの

ジーンズにはモンベルのピンクのフリースを着て回っているんですよ。全然事件に巻き込まれないですよ。こんなピンクのひとに悪さをしようと思えば勇気がいります、町中の人が見ているのだから。犯罪を犯そうと思つたら、そのひとは町中のひとの視線にさらされながらやらなといけないから、大変ですよ。というような感じで、逆手にとつて、ミッキーマウスの覆面をつけたり、いろいろやっているんです。目立つという事で犯罪を防いでいる。

日本人だったら、普通の装いをしてきたら現地が目立ちます。日本人の日本での普通の装いというのがあるじゃないですか、つばの付いた丸い帽子だとか肩掛けバックだとか。ジーパンもそうだけれど、一目で一般的な日本のひとやねと分かるような、日本では一番目立たないような格好をしているひとが、海外では、「はい、わたしは日本のひとです！」と言つてるようなものです。そういうひとの方が危ないと思います。全身ピンクだと、まず日本人と思われることはないですよ。わたしは、まず「コリアン？」と聞かれて、「チャイニーズ？」と聞かれて、「ベトナム？」と言われ、最後までジャパニーズと出て来ない。日本人の一般的な装いを避けるというのがあるかなと思います。

参加者K 団体旅行で行つた場合は前のひとに合わせた方がいいですか。

中村 そうですね、団体旅行の場合は群れに合わせた感じで(笑)、やつた方がいいけれど、一人のときは、群れからいかにもはぐれた子羊のような感じはしてはいけないと思いますよ。あと、わたしが服装

で気を遣うのは、どうでもいいようなティーシャツとかジーンズをはいていくのですけれど、ちよつとまともなシャツを持つて行つた方がいいです。人と出会うときにあんまり変な格好しているとむこうが声をかづらいということがあるので、まあまあ普通のシャツを一枚程度持つていると、向こうのひととも声をかけやすい。いかにも、ヒッピーですというような方が、バックパッカーの中にはいらつしやるのですが、そういう旅行者が日本に来て道を歩いていましたと、そういう場合、声をかけてうちに「いらつしやい」、「お茶していきなさい」、とはなかなか言えないと思うのですよ。普通のシャツを着てきれいそうなジーパンをはいていれば、そういうひとなら、友だちになつておうちに招いて、お父さんやお母さんに紹介してもいいかな、家族に紹介していいかなと。

参加者K シンプルのほうがいいと思つてそうしているのですけれど、外国の場合はよくないということですか。

中村 日本のシンプルというのは、「日本のシンプル」だから、外国のひとにとつては、日本的な服装なのです。ウズベキスタンで杖をついてちよんちよんのミニスカートで旅していた女の子はなかなかのやり手やったのだなど感心しています。

かもられる日本人

参加者L 日本人つてもられる対象になりますか。

中村 かもられる対象だと思いますよ。

参加者L アジアの中でも特にそうですか。

中村 うんー、日本人はお金持っているからね。

参加者L そういうイメージで見られているのですか。

中村 そうですね、まず日本人はお金を持っています。それから、アジアの中でも言葉が下手。言葉ができないと、何が起るかというところ、心のゆとりがなくなるのです。自分の方が言葉ができると思っていると、向こうがどんなにブローケンイングリッシュで騙そうとしてきても、こちらには言葉で説き伏せたり、何とでもできるのです。まわりの人に助けを求めて、このひとあやしくはないですかとか、すぐに警察をよんできて、なんとかかんとかなのでと話したら相手はびびって逃げていきますから。日本人は韓国や台湾のひとと比べても、言葉がいちばんダメかなと、わたしは思います。

それと、日本人ってやさしいでしょう。ひとから声をかけられたら、なんやらにつこと笑って、人から親切にされたらお返ししなければと思ったり、せっかく誘われたのにお断りしたら悪いと思ったり、申し訳ないわと思ったり、そういう文化であるじゃないですか。わたしもそれは自分の中にあるのです。もし、このひと絶対あやしいと思ったら断れますけれど、言葉のせいで、それが見極められない精神状態だったら、同じような韓国人と日本人がいたら、日本人のほうが、断ったら悪いわと付いていく傾向があると思います。ものを勧められて、ふつかけられて、買っていけと言われたときに、見栄を張るわけではないけれど断れずに買ってしまったと言うケースはいっぱいあると思います。中国の

ひとはいらんものはいらんとびつしと言います。そういう意味では日本人はかもられやすいと思いますね。

旅の費用

参加者M ふたつお聞きしたいのですが、一点目は、いま住んでおられるところのことですが、旅行に行かれる間はどうかされているのですか。すごく不思議なのですが。二点目は、海外に長期に行かれるとき、お金がいったと思うのですが、余裕のないときどうやってお金を工面されたのか、このふたつです。

中村 最初の二年間の旅行をしているときは住んでいた家を引き払って、実家に荷物を送って家賃も払わなくていい状態にして、旅をしています。現在住んでいる家は、日本で住所を確保しておかないといけないので、荷物は置きっぱなしで旅に出ます。日本に帰ってきたときにねぐらが必要なので、小さいアパートを借りていて、貴重品などは友だちに預かってもらっています。新聞は取ってないです。郵便は止めていきます。今年なんかは出たり入ったり先まで決まっているので、郵便物は局留めにしておいて、帰ってくるまで連絡して届けてもらおう。

旅行資金の件ですけど、最初の二年の旅をしたときは、先に貯金をしてから行きました。貯金が180万円。180万円が二年間回れるのですよ。日本で二年間180万円暮らそうと思ったら無理。アパートのお家賃だけで終わりですから。180万円のうちの20万円くらい

を出発前に使っちゃったのです。ビデオカメラなどの機材をたくさん買って、いちばんいいカメラなども買って、20万円くらい使ってから出発したので160万円で全部回りました。お金をセーブするために野宿もたくさんしたし、ひとのうちに転がり込んでいくとか。インドで一番安かった宿は一泊50円ですから。乗り物もだいたい二等。いちばん最悪だったのは中国の列車で、立ち席でした。41時間立ちっぱなしで乗っていたのです。もう、悔しかったですけれど(笑)。それは手違いだったのです。一番安い硬座というのがあって、硬い椅子に座れるはずだったのですが、休日で椅子がなくて立っただけのことになった。お昼の二時か三時ごろに出発して、翌日の九時頃に到着だったのですよ。翌日の九時か、長いなと思って。それでも20何時間なので。ところが翌日の九時になっても列車が止まらなかったのですよ。前のひとに聞いたら、明日の九時やと言われて(笑)。そのまま翌日の九時まで24時間、二晩立っただけでした。

そのほか、へんな木造船に乗って、それは普通のエンジンが付いた船なんですけど、それで紅海を渡ったり、ともかくお金をセーブするために、エンジンのない帆船、もう風任せで、そんなのに乗せてもらって行ったりしました。そうすればむちゃくちゃ安いですね。

そんな風な旅をすれば160万で二年行って帰ってこられるという事です。でも無銭で八ヶ月も旅していたロシアの青年なんかもいるんだからと思つたら、わたしなんかほんとに豪華な旅でしたよ。今は、原稿を書けばお金が入ってきますので、だいたいあの国に行ってこれくらいい

原稿を書けばこれくらい入るといふのがあって、そういうのが助けになつているのはたしかです。

参加者B 下世話な話を聞いて悪いのですが、僕は就職しているので、長い旅はできず、三連休とかそれくらいしかできず、長い旅に憧れているのですが、出るときはやっぱり貯めてから行かないといけないでしょう。か。それとも旅をしながら稼ぐとかできるのか、そういうひとに会われたことはありますか。

中村 うん、あんまりいいですね。現地で仕事をする人はたまにいますね。たとえば、わたしもインドで客引きをしましたが、客引きをすると宿代をただにしてくれるとか、それくらいで、なかなか収入にはならないし、日本で稼ぐのがいちばん効率がいい。途上国で稼ぐのは、為替の価値があまりにも低すぎて、やはり日本でどんと稼いでいくのがいちばんいいと思いますね。

旅をしながら稼ぐのであれば、先進国の企業とオンラインで仕事しながら進んでいくのはできるかも知れません。今、わたしがやっているのはそういうスタイルですね。ただ、それはそれなりに制限もあって、出版社からメールが来るので、それに対応しなければいけないし、かならずネットに繋がる宿を探さなければいけないし、締め切りまでに仕事をしなければいけないので、電気もないようなボロボロところに行っても仕事にならないので、それなりにまともな部屋を取って一日中仕事をしなくてはならない。もし、わたしが最初の二年間したような旅をどかんとやりたいのなら、貯めるのがいいと思います。

ひとり四年間、自転車で旅した人に。パキスタンで会いましたが、その人は途中で一回資金が尽きて、そのときアメリカでワークビザを取ってニューヨークで八ヶ月皿洗いをして、また旅の続きをしたということでした。日本に帰国しなくても、ヨーロッパや米国などの先進国に渡って皿洗いなどでキャッシュを手にして、ともかく為替価値は大きいので、ユーロなどで稼げば途上国で何ヶ月も旅ができますから、そういう形でやられる方はいます。

セネガルのトイレ、安全情報

早川 セネガルの藁で作った天然トイレの話がありました、あれは藁の山に登ってやるのですか。

中村 ええ、藁の山に登って自分のやりたいスポットを見つけて、藁の斜面におしりを向けてやります。

早川 藁って、歩くとぐずぐずと崩れていくように思うのですが笑。

中村 それはしっかりと固めてある山です。そんなにふかふかでなくてけっこう太い藁です。日本の藁とは違うのかも知れませんが。

早川 山のあちこちにうんこがあるんですね。

中村 そうです、山の斜面にウンコが引つかかっている状態です。

早川 斜面をウンコが転がり落ちますか。

中村 それは堅さとかによるので(笑)。藁は最後は燃やしたりできるので、衛生的だと思います。

早川 今度はトイレではないのですが(笑)、スーダンと南アフリカの外務省の危険地図がありました、あれは話を聞いていると実際と全く逆になっているように思ったのですが。外務省のひとは何を見てあのような色づけをするのか。どういう情報をもとにして公表しているのですか。

中村 外務省のものも、あれは決して間違っているのではなくて、外務省というのは政府の機関ですから、紛争地帯をひとつの目安にして安全地域を決めるので、たとえばスーダンの南部ならばダルフールの紛争があるので赤にせざるを得ない。だけど、わたしがダルフールに行つて、道を歩いていて何か犯罪に巻き込まれるかといったら、巻き込まれないそうです。それは現地の人たちにもそう言われた。「もし行きたかったらダルフールに行きなよ」と現地の人言うのですよ。「外務省は行つたらあかんと言っているけれど」と言うと、「君が紛争地帯のと真ん中を歩いて行つても、誰も撃ちはしない。撃つても価値がないから。弾がもつたないから」と言っていました。

南アフリカは、外務省としては紛争しているわけじゃないし、ゲリラもないし、白なのだけれど、だけど町中は軽犯罪みたいな、ひったくりや盗難や、そういうものがたくさんあって、そういうものの対象にはわたしは充分なりうる。紛争地帯では安全だけれど、町中では金品を狙っている人はわたしを撃つて価値になると思っている、その違いだと思います。

バックパッカーの間では外務省の安全ホームページを頼りに安全情報

を得るのでなくて、やはりバックパッカー同士で情報を交換して、あの町の雰囲気はどうだったのだとか、そういう情報がいちばん正しいですね。

短い旅は

参加者B さっきの話の続きにもなるのですが、三連休くらいでお勧めのスポットはどこになりますか。

中村 三連休ですか。うんー。わたしだったら日本国内を旅するか、それか、台湾か香港くらいですかね。日本はわたしあまり旅したことはないのですが、一回だけ四国にバックパックで行ったことがあります。そのときは民宿に泊まって、その民宿に薦めてもらった居酒屋さんに行つて、そこでものすごくおいしいワカメを食べて、徳島の鳴門海峡だったのですが、あんなおいしいワカメはあるのかというくらいおいしいワカメに出逢つたりしました。行つてみたいかがですか。その後、香川に行つて讃岐うどんを食べて。あのへんつて、海産物は本当にいいと思いますね。おいしいし、安いのでお値打ちです、温泉も入つてこられるし。

わたしがこれからやりたいのは、自転車で日本の農村や漁村をまわつて、たまにテントを張つて泊まつて、できたらいいなと思つていますが、そういうの、すごく面白そうです。

海外に行く機会があったら、とにかく一カ所にじつとすることですね。この間スロベニアにいたのですけれど、スロベニアにはけっこう日本の観光

客が来ていて、向こうの人は日本人は本当にすごいと言つたのです。六日間くらいのツアーなんですけど、その六日間であらゆる所を完璧に見尽くして、バスに戻ってくる時は絶対五分前に戻ってくるのですつて(笑)。こんなにすごい民族は他にいないのですつて。

スロベニアの隣はイタリアでイタリアのことを悪く言つたりするのですが、けれど、イタリア人に「バスにあと30分に戻つて下さい」と言つたら、「ワー、オーマイ、ガッシューー！」などと叫んで大ブーイングになる。「30分に戻れるかどうか、大議論になつてそれで10分くらいかかる(爆笑)」。それで帰ってくるのは一時間半後くらいになる。それが普通なのに、日本人は時間通りに、完璧に見尽くして、必要なものは食べ尽くして、戻つてくるらしいですね。

アジアなどでも、アジア何とかツアーなどで、強硬なツアーで行つて、ありとあらゆるものを見尽くしてというのがありますけど、わたしはさつきから言つているように、時間をかけることの良さ、一カ所でぶらぶら、だからだとして、お茶を一杯でなく二杯、三杯と飲んで、それがすごくいいと思うので、どこでもいいので、たとえば台湾の台北に行つて、お茶屋さんを見つけてそこに三日間通い詰める。そこのお母さんと仲良くなるかも知れないし、家族と仲良くなるかも知れなし、面白い広がりがあるかも知れない。横に広げるのではなくて下に伸ばしていく、一カ所で深く掘る、そういう旅の仕方があるので、それをお勧めしたい。欲張らずに一カ所にじつといて下さい。

風呂、臭い

参加者N お風呂は最低何日くらい入らなかつたですか(笑)。一度ヒツチハイカーを拾ったことがあつて、自分の家に泊めてやるうかと思ひ、車に乗せたのだけれど、あまりに臭いので(笑)、それがコンビニで買ひ物するといふので下りた隙に逃げた(爆笑)。会場から、わー！、それはー！、何日くらい入らずに我慢できるのかと。僕で二週間ですが(笑)。

中村 二週間はけっこう長いですねえ。わたしは最高でも五日間です。それはしかもモンゴルのゴビ砂漠だったので、乾燥し手痛し、汗もそんなに出ていなかつたので、そんなに臭くなかつたと自分では信じたかったです(笑)。リトアニア人の三人組に捕まつて一緒に旅に出ようと言われ、ロシア製のバンに乗つて出かけたときに、彼女たちは強者で、そのまえにやつていた二週間の砂漠のツアーで一回も風呂に入らなかつたと言つていました。やつぱりちよつと臭かつた。

参加者N 砂漠では汚れないのですか。

中村 顔と足だけは洗います。歯磨きも必ずします。わたしはモンゴルで五日間風呂に入らなかつたときも、ちゃんと毎日メイク落として日焼け止めを落として、次の日の朝にはまたちゃんと塗り直してやつていました。ペットボトルの水で落として。ヒツチハイクするときはあんまり臭いと招いていただけじゃないから。服装もとんでもない服を着ていると一般家庭に招かれなくなるし。清潔に身体を保つのは大事ですね。

早川 そろそろ時間ですので、このへんで終わりにしたいと思います。皆

さん拍手でお礼を(拍手)。ありがとうございました。

資料

一・参加者(39名)

安藤千将、池尾俊明、板谷善次、伊吹すけ子、今川元伸、小川宗一、奥裕治、門野孝之、上中きみ子、治部ひろみ、下西孝明、嶋田利裕、竹中夕益、竹中夕夏、田中克美、田中千春、田中洋子、内藤高志、永井菜月、永井ふじ美、中谷純子、中谷真一、中野岩二郎、中野英二、中村明、西村貴博、野路真実、橋本さなみ、橋本桃佳、早川博信、早川栄子、早川智子、早川由紀子、早川真理子、本田友紀子、宮田奏枝、森本小夜美、弥永雅代、山口孝志

二・発言者

参加者A(50代、男性)、参加者B(20代、男性)、
参加者C(30代、男性)、参加者D(30代、女性)
参加者E(10代、女性)、参加者F(60代、男性)
参加者G(30代、女性)、参加者H(50代、男性)
参加者I(50代、男性)、参加者J(30代、女性)
参加者K(20代、女性)、参加者L(30代、女性)
参加者M(40代、男性)、参加者N(50代、男性)